

続：

見浦牧場の空から

中国山地の雪深い山間部で黒毛和牛の一貫生産に体当たりで取り組んできた見浦牧場の元経営者とその家族が、和牛のこと、牧場のこと、農業のこと、自然とともに生きるということ、少しじっくりお話しします。

見浦 哲弥 著

目次

5度飯(2016/10/19)	3
稲作講座(2016/10/29).....	4
嬉しい話（I工業奮戦す）(2016/2/18).....	5
お客さんと話す(2015/9/10).....	8
ひろしま(2016/9/22).....	10
見浦弥七(2016/1/11).....	12
年年歳歳花相似たり(2017/2/6).....	18
牧場の親父の社会構造論(2017/3/11)	19
ウォーキング(2017/3/11).....	22
小板の日米戦争(2015/1/17).....	23
あーしわかった(2017/7/15).....	27
お祭りと饅頭焼き(2017/5/24)	28
最高の季節(2016/9/1)	30
弥畝山風力発電所(2016/9/20)	31

5度飯(2016/10/19)

春が来て田植え時になると大島（見浦の屋号）は5度飯になる。朝5時になると五月女さんの頭が（上殿のおばさん、大島の女中頭みたいな人で親父様でも頭が上がらなかった）「哲弥さん起きんさいよ」と起こしに来る。泊まり込みの五月女さんの起床時間だ。そして、お茶漬けをかきこんで田植えの苗取りのために田圃へ出る。春とはいえ5月はまだ寒い。日によっては苗代は薄氷が張っていて、5年生の男の子には厳しい気象である。尻込みしても跡取りの男の子はこのぐらいは我慢しろと容赦はなかったね。

それにしても5度飯は都会の3度の食事が当然だった子供には異様だった。勿論、貧しい田舎のことである。漬物と自家製の味噌汁、5度の内、1度か2度、野菜の煮物があればご馳走の世界、魚や肉は盆と正月、食べられるだけ有り難いと思えの世界だった。でも腹が減らなくてね。

ある時、集落の会合で喧嘩があった。山国の例とて集まりの最後はドブロク（密造酒）で酒盛り。どうして、そんな話になったのかは覚えがないが、3度飯が常識の時代に5度目飯とは時代錯誤だと大論争になった。終いには殴り合いでね。会合はメチャメチャ、まだ少年だった私の目には異様だったんだ。

そこで親父さんに聞いたんだ。「なんで5度飯なん？」ところが親父さんの答えは予想外だった。「田植の手伝いに来る人は、家では朝飯を食べないで来るんだ。そして夕飯も家では食べないんだ」。小坂にも水呑百姓と呼ばれる貧しい家庭がありました。その人達に配慮して5度、飯を出していたのです。そう言えば5度飯を主張した人はどん底を経験した人、時代遅れと攻撃した人は物持ちの若者でした。

それは人のプライドを傷つけないで人に配慮することの大切を学んだ第一歩だったんだ。

社会が豊かになり制度も充実して、その日の食事にこと欠く話は聞かなくなったが、社会弱者は何時でも存在する。そして相手のプライドを傷つけないで配慮する援助は何時の場合でも大切なんだ。

時代は進んで社会のシステムも生活も進化したように見えるが、声高に正邪を論じる人が多くなった。そして5度飯のような見えない思いやりは日本人から消えた様に見える。それは社会が生き続けるための潤滑剤だったのに。

2016.10.19 見浦哲弥

稲作講座(2016/10/29)

物置がわりにしていた廃バスが朽ちて雨漏りが激しくなった。何とか整理をと気にはしていたものの、忙しさに取り紛れて放置してあったが、何の気の迷いか?整理を始めたんだ。詰め込まれた様々な品物の中には古い雑誌も決算書も子供たちの教科書や通学服など、出るは出るは、どの品物も記憶があるものばかり。その子供たちも長女が60何歳、末っ子の和弥で50に近い。ずいぶん長い時間が過ぎたものだ。

その中に混じって私の稲作の専門書が現れた。半ば朽ちてはいるが、かろうじて表題は読める。60年もの遠い時間の彼方から記憶を呼び戻した本は朝倉書店の”稲作講座3巻”著者は戸荻義次・松尾田考領、両先生、分厚い本でね。確か価格480円。当時は小板の日当は400円。3巻ともなると崖から飛び降りるほどの勇気がいったものだ。でも、この本のお陰で小板では稲づくり1番になったのだが、本の丸写しでは成功しなかったろう。もう一つ”13度”に書いた小板独特の条件を見つけて付加したことが成功に繋がった。世の中、丸写しだけでは成功しないと教えられた一事でもある。

勿論読書だけで成功するわけではない。泊がけで通った西条の試験場での学習も大きな力になった。勉強は進学しなければ出来ないのではなくて、強い意志さえあれば、あらゆるところに教場はある。没落の家運の中でも学びの場を見つけたすことが出来たのだ。

勉強するということは人生の大きな条件の一つでもある。その結果が電気事業主任技術者検定に合格したのだ。環境に恵まれなくても、それを口実に後ろ向きにならなければ道は開ける。運が悪くて目指す道が閉ざされても再び新しい世界が現れる。俺は運が悪いと諦めるのでなく、一度きりの命、どこまでやれるか試してみるかと挑戦することで、新しい道が向こうからやってくる。人生とは不思議なものである。

その過程の私の道標の一つがこの”稲作講座”、私の大切な人生の道標の一つが遠い時間の彼方を蘇らせてくれた。朽ちた表紙が若かった私の生き様を語りかけて。

2016.10.29 見浦 哲弥

嬉しい話（I工業奮戦す）(2016/2/18)

久しぶりに広島のI工業の社長が訪ねてきた。開口一番「見浦さん、経営が安定した」と嬉しそうに報告されたのです。

彼は60代、家族経営の小さな精密研磨の町工場の社長が、田舎の小さな牧場の爺様に会社の現状を報告する、何か変だと思いませんか。今日はその話です。

もう、何年になりますか、ひょんなことから、彼との付き合いが始まりました。

小坂に別荘が増え始めて20年余り、小さな集落の小坂に、もう40数軒にもなりますか。彼は遅れてやってきた別荘人、小坂橋の近くにヒューズ社のキャンピングカーを据え付けて別荘人になった。

当時、私はその近くの今田さんの畑を借りて牧草を作っていました。この話は、その草刈の作業の休憩時に交わした世間話から始まったのです。

彼が別荘を持とうと思いついたのは、仕事がようやく安定して利益が出始め、長い苦勞のご褒美にささやかな贅沢をと思いついたからだといいます。

そこで、かねてから付き合いのあった大野モータースの社長に相談したのが事の始まりで、彼の勧めで小坂に別荘を持つことになり、キャンピングカーを据えて、小さな贅沢を楽しもうと思ったのが間違いの元だったと話し始めたのです。

長い間辛酸をなめて、ようやく掴んだ幸せにほっとしたのは7ヶ月間だけだったと、突如始まった赤字経営で、金策に四苦八苦するようになって、別荘なんて買わなきゃ良かったと後悔してるんだ、こんな話でしたね。

そんな時に、親しくもない私に内輪話を聞かせる、これは月並みな返事はできないなと思ったのですよ。そこで、腰を入れて聞き始めたのです。

彼の親会社は自動車部品のギヤを作るメーカー、そのギヤの最終研磨をするのが彼の工場、但し技術は最高で3/1000の精度があるんだと自慢していましたっけ。

ワーゲンの部品の加工依頼も来る、世界的にも認められているんだとね。

ところが時代は何か何でもコストの低減、人件費の安い中国に工場も仕事も移転する流れが起きたんだと、そ

して俺のような孫受け工場にも加工賃の切り下げ要請が続いたんだ、その挙句、仕事まで中国に持ってゆかれてな、偉いことになってしまった、こんな話でしたね。

ところが聞いている内に何か違うなと思ったのですよ。私の牧場は和牛肉の生産をしています。ところが仲間の農家は如何に高く売れるかと、そのことだけに血道をあげています。

その為には、ありとあらゆる手段をとるのです。現在の和牛肉の評価は肉の中に如何に多くの脂肪が入るか、その脂肪がいかに小さく均質に入るかで決まるのです。味でなく見た目の美しさでね。それがサシと呼ばれる評価法です。和牛の場合、A1からA5の5段階評価、A5になるとA1の3倍以上の値段がするのですから、気持ちは判りますが、その為に牛の健康をぎりぎりまで追い込んで目的を果たす。

例えばビタミンAは脂肪の分解ホルモンの役割をします。サシは脂肪を筋肉の中に小さく均質

に霜が降りたようにいれる、これが霜降り肉の語源です。ビタミンAはその小さな霜降りの脂肪を分解してしまう、だから人為的にビタミンAの欠乏症をおこさせるのです。和牛は肝臓の脂肪の中にビタミンAを蓄える力が大きいといえます。6ヶ月くらいは全くビタミンAを給与しなくても耐えるですが、それを越えると起立不能、視力低下、ひどい時は盲目になります。おまけに筋肉の細胞膜が弱くなり細胞液が流れやすくなります。その結果ドリップという肉汁が出やすい牛肉になります。それをいかに抑えて見事な霜降りA5肉を生産するか、それが腕の見せ所、それが高級肉だと評価され高値で売れてゆく、食品が味や食味に関係なく見た目だけで売れてゆく、それは間違いだと思うのです。

食べ物は安全で、美味しく、リーズナブルな値段でなくてはならない。恩師中島先生の教えを忠実に守ろうと努力してきたのですが、社会は見た目重視に変わった。でも諦めずに消費者の意識改革に微力を投じてゆく、これが見浦牧場の目標の一つなのです。

ところが社長の話を聞いていると消費者は全く登場しない。親会社の営業の仕入れ担当の事ばかり。少しばかり不自然でしたね。農業も工業も最終的には消費者が品質的に価格的に妥当と感じたら買ってくれる、そうやって経済が動いてゆく。仕入れ担当が動かしているのではないのに、仕入れ係が全て正しいと信じるのが生き残ることに繋がるとは、私には理解できませんでした。

そこで聞いたのです。貴方の仕事が最終の製品の何処にどう繋がるのか、調べたことがありますかと。「そんなことは知らない」という返事を聞いて、こういったのです。

私達がつけている製品は最終的に消費者が評価する。いいものはいい、悪いものは悪いと、値段と品質とを吟味して購入してくれる。私達生産者はその消費者の意見をいかに汲み取るか、そして、いかに対応するかが事業の成否を決まると私は理解している。貴方とは仕事は違っているが、長い目で見ると消費者の意見をいかに反映するかが基本ではないのか。中間の業者は生産者の代弁者に過ぎない。どうして貴方の仕事が最終の消費者のどの部分にどのように使われているかを知ろうとは思わないのか。たとえ下請けの孫受けであっても、その仕事は最終的に消費者が評価するのでは？、間接的だけだね、と。

それを黙って聞いていた彼は三ヶ月後に再び訪ねてきました。「どうしたい」と聞く私に「3ヶ月ほどセールスに各会社を歩いたよ」と答えました。消費者への対応は各会社の企業秘密の一つ、真正面から聞いても答えてくれるわけがない。それならどうするか、新規注文の開拓にと各会社をまわる分には警戒されないだろう。

一代で会社を興す奴は考えることも行動力も常人とは違う。「私のところは、こんな加工が出来ますがお宅の会社で仕事はないでしょうか」と、売込みをかけたそう。本当の目的は他にあるのだから仕事がもらえれば棚ぼた、断られても話が聞ける、ヒントがもらえれば拾い物とセールスに歩いたんだと。

その最大の収穫は発注元の求めている精度は3/1000でなくて5/1000でも良かったということ。それなら合理化の余地はある、一括削磨でも対応はできそうと考えたんだという。「そこでな、システムを考え直してな、何個かを一度に研磨するようにしたんだ。システムは出来たがセッティングが自動では精度が出ない。試行錯誤をしてね。ふと気がついたんだな、俺は熟練工の手を持ってるんだ、使わない手はないとね。熟練の腕と新しいシステムで加工したらうまくいったな。親会社の言い値でも利益が出てな。親会社からこの値でどうして利益が

出るのか教えてくれときたんだ。どうしようか迷ったけれど、俺の腕は真似ができないはずと教えてやったんだ」と。

そこで質問をしてやった。「また調子に乗って1社だけの仕事をしてるんじゃないだろうな」と。「誰がそんなことをするかい。そしたら親会社が文句を言ったがな。他社の製品の中に仕切りを入れるとっただけ」と明るい顔でのたまった。

そんな親父さんを見て、サラリーマンの息子が、親父の技術がそのまま消えるのは勿体ない、元気なうちに自分の物にすると帰ってきた。そして俺の技術の上にコンピュータをのせてな、新しい加工法を開発していると、天国の顔をしていた。

明るくなった奥さんとの二人連れ「見浦さんは、まだようならんか」と自信を取り戻した顔のご夫婦を眺めていると他人の事ながら嬉しくなってね。私の小さなアドバイスでも少しは役に立ったかと。

しかし、見浦牧場は依然悪戦苦闘が続いている。昔の軍歌ではないが“何処まで続くぬかるみぞ”である、それでも私達は頑張るのだ。

2016.2.18 見浦哲弥

お客さんと話す(2015/9/10)

2015.9.10 雨、お店にお客さんが来る。横浜の人で山登りが趣味だとか、東日本は折から悪天候で西日本ならできると走ったが、こちらも雨、することもないので目に付いた牧場の売店で肉でも買って帰ると立ち寄ったとか。

折角だから牧場でも見学させてもらうかと声をかけられた。丁度、私が通りかかって案内を引き受ける。都会の人は自分の専門外には智識が広くない。しかし、田舎の住民と違って好奇心は旺盛である。この人たちの関心を引くには、地域の特性と一般に知られていない情報の提供が効果的である。そこで牧場が見える牛舎に案内、一望10ヘクタールの草地と約100頭の黒牛は、中国山地では珍しい風景になって、見る人の興味をそそるらしい。そこで見浦牧場の一風変わった情報の提供をしたんだ。

先ず牛が年間を通じて放牧されていること、そして海拔が800メートル近くで、積雪が2メートルばかりあること、厳寒期は零下10度以下が続くことも珍しくないこと、など。そして見浦牧場で生まれた牛のみで牛群が出来ていること、50数年外部から牛を導入しないで、選抜淘汰を繰り返したこと、高級牛のサシを追及する牛作りのでなくて、利益追求の大型化でなく、モットーは、安全で、美味しく、リーズナブルな価格の実現を追及してきたなどを話して差し上げた。

自然の中での牛の集団飼育は、彼らが生きるために学び、その智識を次世代に伝えてゆく。頭脳は人間だけの特性でないだと、人間の驕りを打ち砕くような彼等の本能等々、都会人はそんな話を興味を持って下さる。

見浦牧場の1-2キロ圏内には、ツキノワ熊の営巣地が2箇所はあるらしく、何度も牧場内に出現する。最初に襲われたのは30年余りも昔になるか、日暮れに子牛が2頭群れから離れて行動し1頭が殺された。母牛が夜中に我が子が群れにいないことに気付いて騒ぎ始め、翌朝、牧場内で叩きつけられて死んでいるのを発見したんだ。暴れん坊の熊君も、2頭同時に殺すことは出来なくて片方は助かったのだが、殺された子牛は衝撃で頭皮がはがれていた。しかし、それからの牛達の反応には教えられるものがあったんだ。

まず、集団で行動するようになった。子牛と親牛は離れることはあっても子牛同士で集団を組む。よく見ると中心になる牛がいてその牛が動くにつれて集団が移動してゆく。牛にも強弱があつていじめっ子や優しい牛と様々だが、中心になるのは優しい強い牛なんだ。教えられたね、ボスは優しさがなくてはいけないと。家畜の牛でもそうなら、人間はそれ以上でなくてはいけないんだとね。おもねることは要らないが、思いやりがとやさしさが必要なんだと。最近の世の中は人は性善と信じて非武装、非暴力なら自分は何もしないでも安全だと信じている。ところが見浦牧場には牛は何もしないのに腹を減らした熊君がやってきて襲う。そして弱い牛達は集団を組み身構えることで対応している、決して攻撃することはないが。人間も動物だと私は思っている。攻撃してはいけないが、身を守る手段は持たなくてはと思うんだとね。

そんな話をお客さんは黙って聞いていた。反論されなかったのは私が老人だったからだろうか。軍国日本の戦前、戦後を体験した生き残りの人間として、動物が語りかけている行動の中に私達の真実があるそんな気がしているのだ。

お客さんは反論はせずに聞いて、来て良かったと帰られた。小坂という小さな集落のはずれに起きた、ささやかな話である。

2015.9.10 見浦哲弥

ひろしま(2016/9/22)

2016.5.27 広島市の平和公園にアメリカの大統領オバマさんがやってきて記念碑に献花して下さった。間一髪12時間の違いで命を永らえた私にとって感無量のものがある。

日本が暴走した2、26事件から我が家の近辺で起きた日本暴走の結果、内外の多くの人命が失われた。その張本人の陸軍の急進派の御大は靖国神社にいたというから日本人も狂っている。天下の秀才と言われた東条が2000年も続いたという日本を破壊して、他の指導者がそれぞれ自決して自分を裁いたのにピストル自殺の真似事ですまし、責任をヒロヒト天皇に擦り付けようとした、その彼を靖国へ祀るといふのだから狂っている。陸軍きっての秀才と言われた彼の生き様は頭でっかちだけでは集団を指導し生き延びさせることは不可能だということかもしれない。自然の中で暮らしている牛群を見ていると利口な牛即リーダーでは牛がうまく育たなかったね。強さと利口と優しさと決断とのバランスの取れた牛がリーダーだと安心して見ていられたがね。

あれから70年、幼いながら戦前の広島を知っているし、(毎年夏休みには親父さんの勤務地の福井から小坂に帰省していた。昔は2日がかりの大旅行、必ず広島に一泊した)戦時中の広島も陸軍の幼年学校受験の為、広島で宿泊した。原爆直前の広島に建物疎開の作業で県庁の講堂に泊まって10日ほど働いた。広島の前爆前日の夜広島を離れて辛うじて生き残った、あの一日の記憶は未だ新しい。そして原爆投下の3日後、一時帰宅を許されて帰宅の途中、乗換の可部駅で被災者を見た。駅前の広場や構内の貨車の中に並べられた数多くの瀕死の被災者や、死体を見た。「水、水」と微かに訴える声は未だに耳に残る。数年後小坂にお嬢さんに来た友人は動員で広島で被災者の死体処理で働いた体験を話してくれた。感情が麻痺して何も感じなかった、そして恐怖を実感するまでには長い時間が必要だったと。

牛田に住んでいた岡本の伯母さんは6日の朝、挨拶をしながら家の前を通り過ぎた人たちが15分もしないのに焼けた皮膚をぶら下げて幽鬼のような姿で「水、水」と訴えながら帰ってきた姿を忘れることが出来ないと話してくれた。それは地獄だったと。70年は草も生えないと言われた広島だが私が働いた1年半後、道端には雑草が生え、八丁堀から本道通りには、まばらながらバラックのお店が並んだ。現在、パン屋のアンデルセンのお店になった銀行の廃墟は無残な姿を晒していたが、広島は生きていた。もっともバラックの裏は水道の鉛管が幽鬼のように無数に立ち並び、傷んだ蛇口から水が無駄に流れてはいたが。

お店の坊っちゃんの子守で歩いた道端の本川小学校の地下室にはドス黒い水が溜まっていた。近所の伯母さんが「まだ何人も沈んでいるのよ」と話してくれた言葉は頭から離れない。早朝、荷物を積んだ馬車が本道りを通る。その馬糞を素早く掃除するのも小僧さんの役目だった。でも日本人は凄い、復興し始めた広島は見る見る変化していった。夜学の途中の広島駅の変化は今でも思い浮かべることができる。でも裏道りは寂しくて怖かったね。その広島が見事に復興した。廃墟の中にあつた原爆ドームは華やかなビル群に囲まれて感心を持つ人以外、注目をひかない。あの惨劇を思い出すのが8月6日の原爆記念日のときだけ、体験した人以外、あの惨劇は想像出来ないのだろう。

そして私の文章の中でも語られることが少なくなった。でも忘れてはいない。拙い私の文章の

中の、あちこちに散見する戦争や原爆への思いを嗅ぎ取ってほしい、そんな気持ちでキーを叩いている。

2016.9.22 見浦哲弥

見浦弥七(2016/1/11)

彼は私の父である。従って貴方にとっては曾祖父ということになる。先祖というものは若い時は興味がないもので、私も祖父のことにはあまり知らない。まして曾祖父ともなれば、断片的な知識しかない。しかし、その遺伝子は私の生涯に大きな影響を与えたのだから、知らないということは残念なことである。それによろやく気がついた。そこで貴方が私の轍を踏まないために記憶にある父のことを書き残すことにした。貴方の記憶の断片にでもなれば幸いである。

彼は明治20年に生まれた。父は弥三郎、一人っ子だった由で大切にされたという。見浦家は彼で8代目、血統が続いた点では小坂では最古。ところが伝えられる歴史では2代ごとに栄枯盛衰を繰り返したという家柄、弥三郎は家運を盛り返した人で、弥七の時代は見浦家の頂点の時代、これが彼の才能を開花させた。

貴方は明治政府が初等教育の義務制を施行したことを知っているだろう。国の政策だから小坂にも小学校がつくられ義務教育が始まった。明治の初めのことである。小坂の小学校跡にある廃校舎は三代目、但し義務制は下等小学校と呼ばれた4年生まで、それからは加計にあった上等小学校に進学したんだ。但しこれは義務教育でなくて授業料が要ったらしい、それも4年制でね。勿論、中学校も高等学校も大学も存在したのだが山奥のどん百姓の小倅が行けるわけもなく、上等小学校で我慢した由。ところが寄宿舎がないので下宿、それでも卒業までは資金が続かなかったとかで2年で中途退学、従って正規の教育は6年しか受けていない。

ところが彼の祖父亀吉は頭の切れた人で国道建設(191号線)のおり、県のお役人と渡り合って小坂の集落をかすめて通す計画を集落を縦断させることに変更させたという、これが旧国道、当時は従前の権利が侵害されると新しい交通に反対する連中が多くて、鉄道が町から離れたところを通ったり、道路が集落を外れたところに建設されたりして後年に問題を残したところが多かったのに、彼は道路から離れた集落はやがて消滅すると、小坂の真ん中を縦断させた。お陰で田圃を2分された農家が激昂して殺してやるといきまいたとか。弱小集落の小坂が生き残ったのは彼の先見性のお陰だと思っている。ところが、そんな頭が切れる彼が文盲で字が読めない。息子の弥三郎は字が読めるのだが、一言居士(いちげんこじ)で親父のやり方が気に入らない。県庁や役場から文書が来ても「何とか何とかトー」と要点を言うのみ、文意のみでニュアンスも糸瓜(へちま)のない読み方、爺様、大いにむくれたのだが読めるのは弥三郎だけでは喧嘩にもならない。そこで弥七に勉強させて知識をつければ弥三郎に頭を下げずに済むと気がついた。亀吉爺様、家長の権威を發揮してこれからは知識の時代、弥七には勉強をさせると宣言、以来、どんな繁忙期も親父が「勉強をする」と言ったら仕事に出なくて済んだとか、私とは偉い違いである。もっとも頭の良さは、これから話すように抜群で天と地ほどの違いはあったのだが。

昔は満20歳になると兵役が義務で徴兵検査と称して体格検査がある。甲、乙、丙、と区分されて甲、乙に区分された青年は2年間の兵役につく。兵役にも職種があって、兵科というのが軍隊が進歩するにつれて兵科も増えて、親父さんの兵科は工兵、今様に言えば軍隊の土建屋。ところで話をもどるが彼は明治20年生まれ、従って徴兵されたのは明治40年という事になる。貴方も歴史で習ったと思うが日本がロシアと戦った日露戦争というのがある。極東に大きな国土を持つロシアが冬季も使える不凍港を求めてシベリアからの南下政策で当時の中国、朝

鮮にまで勢力を伸ばし始め、日本の権益と衝突して戦争になった。GNPが6倍の大国と日本が国家の存亡をかけて戦った戦争である。当時、大連の近くにある旅順港はすでにロシアに租借され東洋におけるロシア極東艦隊の軍港として整備されていた。それを守る堅固な旅順港要塞、この攻略に乃木將軍指揮の陸軍が膨大な戦傷者をだしたのだ。当時の日本軍は指揮官が先頭に立って戦う戦法だった。従って将校の戦死者が続出、それを補充するために苦慮したんだ。将校は兵隊と違って養成に時間がかかる。そこで兵隊の中から優秀な人間を選抜して短期間で将校に仕上げる制度をつくりあげて対応したんだ。これを1年志願兵制度という。明治37、8年に起きた日露戦争から2年も経過した明治40年頃は将校の補充も完了していて、士官学校などの養成機関の卒業生などの正規の補充で事足りていたと聞く。ところが優秀な人材を発掘するという、この制度は日本が第2次世界大戦で敗戦になるまで存在したんだ。需要に応じて合格者を増減しながらね。

親父さんはこれに挑戦した。結果はその年、全国で3人の合格者のうちに滑り込んだ。何しろ徴兵されて2年の兵役がすむと階級が一つ進んで1等兵になって帰るのが普通。それからは赤紙と呼ばれた徴兵令状で軍務について階級があがる。ちなみに小坂では伍長が最高位だった。当時の若者は小学校の高等科を卒業すると青年団なるものに入団、定期的に軍事訓練を受ける。そのときに在郷軍人と称して昔の軍人が階級章のついた軍服を着て指導にくる。普段は茶店の親父さんが軍服を着ると伍長さん、途端に発言に重みが増す、そんな田舎に2年で将校になって帰ってきたから大変だ。いっぺんに町内の有名人になった。ちなみに彼の最後の兵役の位は工兵中尉、家の中にサーベル（西洋式の長剣）もあったし軍服もあった。今でも倉を探せば彼が学んだ軍隊の教科書があるはず、手榴弾の製造から爆薬の取り扱い、陣地の建設など興味を引く記述がある。

もともと勉強好きの彼が1年志願の合格で自信をつけた。そして教員の資格認定試験に挑戦したんだ。そして合格したのが中等教員数学科、これが彼に広い世界を見させたらしい。それからは暇があれば数学の勉強、後年、彼が口癖だった言葉は「数学は貧乏人の学問、紙と鉛筆があれば新しい世界をのぞける」と。

勿論、勉強の面白さに取り付かれた彼は小坂を脱出、広島第一中学校に（現在の国泰寺高校）奉職、小坂の西岡の娘さんと結婚して牛田に住みついたとか。

当時の大家さんだった岡本のオバサンが言っていた。勉強に気がのと一週間も10日も一言も口を聞かなかったとか。最初の奥さんとは広島で死別。熊本の県立第一中学校に転勤した。しかし、その間の消息は知らない。そして福井の第一中学校（現在の藤島高校）に転勤、私が物心がついた頃は教頭先生だった。ある年福井で陸軍の大演習があり、福井城址にあった第一中学校の校舎が臨時の大本営（天皇宿舎）になって、接待係となって天皇（昭和天皇）陛下のお世話をしたと聞く。彼の口癖は昭和天皇は純真で気さくな青年だったと。後年、第2次大戦に参戦、内外の人々に多大の被害を与えた張本人という巷間の説に賛成の私を叱って、「軽々に人を判断をしてはいけない、彼はそのような人間ではないと教えられた。そして「私は3000人の青年を育てた教育者としての経験からも彼が戦争を指導したということはあるに、私の知る昭和天皇は正義感の強い純真な青年だった」と、この話が私の世界観に大きな影響を与えたんだ。

昭和14年、彼は県立三国高等女学校の校長に就任した。昭和16年、様々な出来事の末の圧力で退職するまでの2年間、私は三国で多感な少年の時期を過ごした。従ってこの頃からの父の記憶は伝聞ではない。

三国の2年間で父には大きな事件が二つ起きた。その一つは生徒の女学生と他校の中学生との雑魚寝事件、当時の女学校には不純異性交遊は即退学と校則にあったそうで、それが発覚した。勿論、父は即、退学を申し渡したのだが、生徒の親が地域の有力者で内分にと圧力をかけてきたとか、こんなことが明るみに出たらお嫁に行けなくなる、何とかならないかと。父は校則は校則、たとえ有力者の子女でも特別ではないと突っぱねた。

翌年、三国の汐見というところにあった住居の周りに、目の鋭い刑事と警官がうろつくようになった。後年、父はそのときのことを話してくれたのだ。

昭和15年、アメリカとの国際関係が緊張を始めていた頃、学校に話を聞いてくれと大本教の教祖が訪ねてきたとか、父は外ではと校長室に入れて話を聞いたとか、ところが大本教は戦争反対を主張していた、時の政府、特に過激な軍部の注意団体だったのだ。その教祖を校長室に上げて話を聞いたのだから、尾行が本部に報告したのは言うまでもない。父としては正式に訪ねてきた訪問者に門前払いを食らわす非礼は出来ないと校長室で話を聞いた、当然の行為だったのだが、社会は父の常識の範囲を超えて暴走を始めていたんだ。翌日から尾行と、汐見の家の監視がついた。翌年の学期末、父は教職を辞した。54歳、定年にはまだ時間があつた退職の裏にはそんな事情があつたのだ。有力者の反感をかっていた父には抵抗するすべはなかつたとか。

退職が決まった翌日の新聞には三国高等女学校長、見浦弥七氏勇退と大きな記事、あの勇退の大きな見出しは記憶にある。

退職が決まってからの父は原稿書きに没頭したんだ。生涯の勉強課題だった数学の本の、題名は”非ユークリッド幾何学問題集”確かこんな題名だったと記憶している。もう物資が不足し始めていて用紙が手に入らない。ガリ版刷りで外装だけは印刷所の好意で製本してもらった。配達された本の山が玄関に積まれた光景は臉に残っている。それを友人や学校関係に配って数学者見浦弥七が表舞台から姿を消したんだ。引越しの手伝いにこられた先生に、「父ちゃんが本を出したんだ」と自慢したら「私も貰った」と返事をされて誇らしかった。その年か母が難しい本を出して「これは数学の学会の本、ここに父ちゃんの論文が載っている」と話してくれた、「これで2度目なのよ」と。

この時のことは長く記憶にあって後に聞いたら、一度だけ話をしてくれた。「俺は専門の非ユークリッド幾何学でアインシュタインの相対性原理の証明をしようとしたが、どうしても出来なくて、それが残念だった。当時の日本には彼の理論を理解できる学者が4人いたんだが、俺はそのうちに入れなかつた」と。

父が小坂を離れたのは17歳の頃、それから兵役が終わって一時期小坂で生活した時があつたが、間もなく結婚、そして広島第一中学校に奉職し、牛田に居を構えた、出来の良すぎる一人息子のわがままを弥三郎爺様は止めるすべがなかつたとか、時おり知人を頼んで様子を探らせたり、生活費を送ったり、陰では随分気を使ったと聞いている。

ともあれそんな按配で親父さんの農業は見よう見まねで経験がない。日本のように地勢や気候が千差万別のところでは耳学問や見よう見まねでは、成果は上がらない。弥三郎爺様、見るに見かねて口に出して意見をしたら、折悪しく親父さんの退官を聞きつけた神戸の某私学から数学教官として迎えたいと校長さんが、広島からバスで5時間の小坂まで訪ねてきた直後、「わしのやり方に文句があるのなら、また学校にもどる」と宣言されて、弥三郎爺様何も言わなくなつた。翌年、母（淑）が亡くなって、半年後、弥三郎爺様が死んだ。そして素人百姓の父と小6を頭に5人の子供の大畠の悪戦苦闘が始まつたんだ。

大島に”上殿のオバサン”なる古くから手伝いに来るお婆さんがいた。田植えの季節になると何人かの婦人を連れて現れる、早乙女さんである。そして見浦の田植えが済むと蓑造りの材料になるコウラなる草の採集に来る。大島には彼女のためのコウラ池（コウラをつけて腐らせるため池）があった。腐って繊維だけになったコウラを綺麗に洗って干して自宅に持ち帰って、冬の間はそのコウラで蓑を編む。北陸の藁で作った蓑と違って、上殿のコウラ蓑は軽くて耐久力と保温に優れて高級品、そんな関係で彼女には父も頭が上がらない、長い間のそんな関係で見浦家の内情は何から何までご存知、私たちが生まれるときも福井まで駆けつけて家の中の切り回しをしてくれた。母が亡くなったときも最後の看病の采配を振るってくれて、まさに身内の大叔母さん、それが父のにわか百姓を見てこれでは見浦家は滅びると感じたらしい。とはいっても子供は小学6年生が頭、他の子供はまだ幼い、そんなことは言っても背に腹は変えられぬと私の特訓が始まったんだ。今でも忘れないのが田植え、泊り込みの五月女さんは夜明け前に苗取りに田圃にでる、したがって起床は5時、朝飯を食って支度をして田圃に出ると、東の空が僅かに白みかける、寒い朝は苗代に薄氷が張っていて、最初の一足は身がすくむ、そんな田植えの季節が始まるとオバサンが「哲弥さん、起きんさいよー」と呼びに来る、父が起きるのは30分後、弟妹が起きるのはさらに遅い、幼い子供の食事を済ませて、親父さんがオドロ（小枝を集めた薪、木小屋という小屋に前年集めて乾かしてある）担いで来て畦道で盛大に焚き火をしてくれる、それが待ちどうしくてね、そこで冷え切った身体を温めて再び苗取り、この頃に地元の五月女さん達がやってくる、9時過ぎに朝飯、一日5回の食事、5度飯という制度、なぜ5度飯なのか訊ねたことがある、答えは貧乏な家庭では朝食を取らずにくる、手伝い先の3度の食事が全てなんだ、漬物と辛い味噌汁のおかずなんだが腹いっぱい食べられることが田植えの手伝いの要件なんだと、年配の五月女さんの間での田仕事は子供ながら社会勉強だった。

閑話休題、そんなわけで上殿のオバサンの教育は尋常でなかった、牛のロープ作りも、夜なべの粉挽きもオトコシ（住み込みの男衆）と同じ扱い、後年兄弟が「兄貴、よく知っているね」と感心してくれたが、それも彼女の教育のおかげなんだ。

当時、見浦家には雌牛、雄牛が一頭ずつ、たてがみが白と茶色の馬が2頭、の計4頭いたんだ。雄牛とは言え体が小さくても気が荒くてね、力はあるんだが言うことを聞かない。お爺さんが見浦で生まれたんだからと飼育し状態の牛だったが雄牛だから言うことをきかない。腹を立てると角を下げて向かってくる、住み込みの林蔵さんも雇い人の又一さんも怖がって、結局は小学生の私が使うことに、ムチで叩いたことのない私には仕事を止めようとゴネルことはあっても追っかけれることはなかった。ところが短気な親父さんは、歩かんのならこうするとムチで叩くもんだから、牛君言うことをきかない、仕事ははかどらない。結局、田圃で牛使いは私と言うことになった。動員で家を空けた1年、親父さんは、どうやって仕事をこなしたんだろうね。

とはいえ、私心のない親父さんには集落の揉め事が持ち込まれる。相続の争いから、浮気の始末まで、ただでさえ見浦の仕事が山積しているのに解決に走り回る。自分達が食料が足りないというのに、ジャガイモが少しばかり多く出来たからと疎開した家族に届けさせられたこともある。父が亡くなった後、そこの奥さんから「貴方のお父さんには大変お世話になって」と涙ぐんでお礼を言われた。でも人に迷惑をかけることだけは極端に嫌ったね。そんなわけで見浦家に伝統に従って衰亡の坂道を転げ落ちて、どん底から這い上がるという歴史の繰り返しがあった。でも、どんな時でも、揺るぎのない信念で生き抜いた親父は私の誇りなんだ。

彼の人生の師が誰かは知らない。見浦家では勉強以外には特別はなかったと、借金の言い訳に新庄（今の北広島町）へ行かされた話は何度も聞いた「旦那さん今年はこれだけしか出来なんだけー、後は来年でこらえてつかーさい」の口上で。その悔しさが弱者への配慮になり、勉学へのバネになった。でも不器用な人だったな。

長々と父弥七の話を書いた。彼の全貌を伝えることは出来ないが一面だけでも理解してもらえたら望外の満足である。彼に較べれば私はとるに足らない人間だが全力をあげて生きたことだけは認めて欲しい。そして彼の遺伝子が私を経て貴方にも伝わっていることを忘れないで欲しい。

人生は長いようで短い。認められようと、認められまいと、全力で生きる。それが自然を神とし、父を師として生きた私からの伝言である。

2016.1.11 見浦哲弥

年年歳歳花相似たり(2017/2/6)

和弥のお嫁さんの亮子くんは見浦牧場の黒柱である。その彼女が後5年で50歳になると宣った。日々仕事に追われる毎日で自分の年を数えるのも忘れがちだが、歳月の扉は確実に時間を積み上げる。息子の和弥の所に半ば押しかけで来てくれた彼女、3人の健康な孫を見浦家に贈ってくれた、我が家の恩人である。

跡取りと思っていた長男がコンピューターの道を選んで九州で就職、会社の同僚と結婚、やりたい仕事が出来ないからと東京へ、そして40代でそのソフト会社の最年少重役に、彼は彼なりに自分の人生を追いかけた。

そこで後を継いでくれたのが一番下の和弥、ところが時は農村崩壊の始まり、妹が飛んできた「あんた気が狂うたんじゃ無いの、あの子は町でも食べて行ける頭を持つと、こんな所に残したら嫁さんもおらんで」と。それでも親父さんが「見浦家が潰れる」と訴えた一言は重かった。そして彼は見浦家を継ぎ、亮子君は広島市から追いかけてきてくれた。そして3人の男の子を産んでくれた。それぞれ特徴のある子供たちを。長男は中学2年、私が動員で小坂を離れた年になって、大人びてきた。

時は全国的な農村崩壊のとき、国内の食料自給率は30%あまり、1億人に及ぶ人口の食料の大部分を輸入に頼る危険は知識人でなくても感じているが、大変だの声は聞こえるが他人事のよう、戦後の食糧不足のときのような真剣味は感じられない。

農業の復興は人作りなくては不可能だと私は思う。農業の教育は高校から大学まで整備されてはいるが、知識の詰め込みだけで人作りには程遠い。長男の晴弥が九大の農学部にて在学中に九大の実習牧場に行った折の報告が頭をよぎる。彼に九大は国立の有名大学、農学部なら研修農場がある筈、見浦牧場で未解決の問題のこれこれを調べてくれと依頼したんだ。ところが彼が報告して曰く、「実習に行ったら、場長が“ここは農業を教えるところではない、農業とはこんなものだということを伝えるところだ”と言った」とか、「親父さん、役に立つ話はなかったよ」と、そこで思い切ったんだ。習えるところが無いのなら自分で実証し教えるしかない。学問のない1農民が挑戦するには、あまりにも巨大な壁だったが後へは引けない。お陰で家族を厳しい道に連れ込んでしまったのだが、やっとかさ、ここまでたどり着いて文章にしている。役には立たないかもしれないが、これは私の意地である。

幸い私の家族は、それぞれ気性は異なるものの、皆前向きな性格、有り難いことだ。彼等のこれからの人生を見ることが出来ないのが残念だが、生きてよかったと思える家族たちである。

[年年歳歳花相似たり、歳歳年々人同じからず](#)、長い年月この言葉を噛み締めながら生きてきた。大切な私の心構えの言葉である。

さあ今日も1日全力を尽くそう。同じ日は二度とは訪れない。明日は明日、今日は今日、前を向いて全力で生きようと、自分に言い聞かせている。

2017.2.6 見浦哲弥

牧場の親父の社会構造論(2017/3/11)

もう50年余りも牛を飼っています。しかも放牧形式の集団飼育で、この方式の飼育形態は日本では数少ないのではと思っています。

近辺でも見浦牧場のような小さな牧場から中山、松永のような大牧場まで大小様々な牧場が存在しています。

私が生きたこの中国山地でも大小様々な形態の牧場が設立され消えて行きました。辛うじて生き残った牧場の一つ、見浦牧場が生きている日本社会の仕組みを、牛を飼う生活を通じて考えて見たいと思うのです。

最初の2頭から現在の180頭まで増えてゆく過程の中で、彼等が群れを作る仕組みや、集団のルール、ツキノワグマから身を守る護身術、等々、生きるための変化を作り上げて行きました。そんな彼等を見ていると人間も教えられるところが多々あるのです。今日はその話を聞いてください。

牛は集団で暮らす動物で厳然たる順位がありますが、その一生をよく見ると、生後12ヶ月くらいの所に境があります。それまでは、はっきりした順位が無いのです。勿論、餌を食べる時は力の強い子牛から食べ始めるのですが、横合いから小さな子牛が割り込んできても頭で押し出すくらいで、追っかけていじめることはありません。ところが12ヶ月を過ぎると押し出すだけでなく後を追いかけて順位を守れといじめるのです。

牛の世界は厳しい順位の世界、その能力と力で決まる順位を守ることで集団の中での生活が許される、そんな厳しい掟で集団が維持されている。注意深く観察すると他にも数々の掟があり、それを守ることで集団で暮らすことが許される、牛はそんな掟を守る集団なのです。

ここ小板はツキノワグマの生息地、近隣の山林が人工林に変わって、自然の食料が減りました。一方、登山客やトレッキングなど観光客が増加し、弁当のなどの残り物の味を覚えて集落の近隣で生活する個体が増えました。彼等は生きるための知恵を持っています。知能も体力も野生動物の中でも凶抜けて高い。他の文章で報告した様に見浦牧場でも被害が出ているのです。

もともとこの地帯のツキノワグマは性質が温和と言われています。

天候が良くて、山にドングリや柴栗が豊富で食べ物が充分あれば、牧場の周りで気配は感じても、牛の餌を狙って畜舎や倉庫を荒らすことはありません。

ところが自然は時々悪天候も贈り物とする。山が不作で食べ物がなくなると彼等の頭がフル回転をする。生きるためにね。人間の周囲に現れて、農作物を狙い、果樹園を荒らす。そして畜舎に侵入して牛の餌を横取りをする。それでも足りない時は倉庫を壊して餌をあさる。

十数年ごとに、極端な悪天候がやってくる。輸入や備蓄の取り崩しなど、人間は生きるための手段を持っているが、それを持たない熊君は最後の手段として牛を襲うのです。

襲撃されて死亡した牛は、これまでに7頭あまり、食われたのは2頭ですが、追い回されて暴走して死亡、恐怖のショック死など死因は様々ですが、この50年間にかなりの被害がありました。

ところが牛も知能が高い動物、熊に対する恐怖は集団の中に知識として蓄積されて弱いながらも対抗する方法を編み出しているのです。

まず、1—2頭で行動することがなくなりました。近くで熊の気配を感じたら集団が大きくなり、一箇所に留まる時間が短くなります。たとえ美味しい草があっても絶えず移動します。そんな集団の行動を見ていると、熊がどの方向にいるのか、近くなのか、気配だけなのか判るのです。

もっとも乳離れをしたばかりの子熊だけの時は集まってからかかっていましたから、危険に際して彼等なりの判断を持っているようで、さすが高等動物と変な感動をしたものです。

朝夕、牛を見ながら生活していると、人間と同じように個体によって少しずつ性質が違います。優しい牛、気の荒い牛、仲間をいじめる牛、いたずら牛、など様々です。

ところが注意深く見ると、いじめる牛の集団は小さくて、いいリーダーで優しい牛の集団は大きくなるのです。

思い出すと見浦牧場の最初は1—2頭飼いの農家が生産した子牛を買って初めたのです。放牧しても夕方になると人間が集めて畜舎に連れて帰らなくてはなりません。そして10数頭に増えた頃も夕方の牛集めは仕事の一つ、しかも何頭かは別行動、広くもない牧場を探して歩くことが日課でした。

ところが何時の頃からか、この作業がなくなりました。別行動の牛が出ても数頭以上の集団を組みます。熊の被害が出始めた頃からですね。

彼等は自然の摂理に従って行動しているのです。1頭でいる時に襲われたら100%殺される。ところが集団が大きいほど、殺される確率も確実に小さくなる。そして集団の大きさを、リーダーの優秀さと優しさが決めている。この法則に気付いた時は驚きましたね。動物の本能は人間の教科書より素晴らしいと。

戦後の日本経済の高度成長で道路が良くなりました。生活も豊かになりました。市場経済の恩恵を受けて一般の人達も、それなりの恩恵を受けました。そして、すべての事柄をお金に換算して利害を判断する悪しき考えが常識化しました。田舎から思いやりや、助け合いの精神が消えて、「なんぼ呉れるんなら助ける、儲けにならないなら、わしゃ知らん」などとぬかす奴まで現れて、殺伐な雰囲気が出ることもある、そんな時代になりました。

私が「ヒューマンリング」に書いた当たり前の人助けが美談となりました。文章「同行崩壊す」を読んだ人が感心して、これでないと田舎は成り立たないと言ってくれました。当然のことが忘れ去ろうとしていると。

イギリスの産業革命をもたらした原始資本主義は極端な格差を生み出して、底辺の人達は基本的人権まで否定されました。この問題を理論的に論破したマルクスの資本論は議会制社会主義と一党独裁の共産主義の政治体制を生み出しました。しかし、70年余りの共産主義の政治体制は崩壊し、人間はひとつの枠、ひとつの考えに押し込むことは不可能だと答えが出ました。そして時代はアメリカの修正資本主義、全世界がこのシステムに飲み込まれました。しかし、メイフラワー号でアメリカに移住したイギリスの清教徒のグループは資本主義の欠点を聖書の教えでカバーしようとしていました。それが世界に修正資本主義を広める要因となりました。が、日本人はキリスト教と資本主義の微妙なバランスで成り立っているアメリカの方式を宗教抜きで導入しました。いや日本の宗教家がことの本质を理解しないまま、政治に結びついたり、在来の殻にこもったりして新しい役割を担うことを放棄してしまった、私にはそう感じるので

す。

敗戦から70年、都市には高層ビルが林立し、新幹線の高速運行は当たり前、高速道路と自家用車は当然の必需品になりました。そんな豊かな日本なのに、何かが欠け、何かが間違っている、それが私の文章が思いもかけない人達に読まれ、感銘？を与えている原因では、そう思っているのです。

私は昭和29年に日本社会党に入党しました。「格差のない平等な社会」のモットーは、動員で強者が弱者を搾取する現実を少年の目で確認した私には魅力でした。が、この組織の中にも様々な格差があり、差別がありました。

広島であった若手党員の研修会で当時の江田書記長が会の終了後、取り巻きだけを連れて街に繰り出して行った時、理想と現実のギャップを感じたものです。

ある時、県本部に前田先生（山県郡の活動家の大先輩）のお供で立ち寄った時、呉の市会議員の立候補者と立ち話をする機会がありました。「どうして社会党ですか」と、お聞きすると「選挙で票が集まるから」と当然のように答えられた。思想信条が同じだからという言葉に期待していた私にはショックでした。左の人間でも目の利益が優先するのだと。

しかし、前田先生は私心のない人でした。正しいと信じたら利害は思考の外でした。そのせいで加計町の3大名家の一つと評された前田家が崩壊したのですから、その生き方は私に影響を与えました。弱者に助けを求められたら全力を尽くせと、前田先生、私の親父さんなど、私は何人かの素晴らしい人生の師を持ったのですが、貧乏からは逃れることは出来ませんでした。でも、理屈だけの人間にならなくて済みました。

理論は大切です。しかし所詮は人間の考えたこと、絶対はありません。それを自然の摂理で補正しながら参考にして生きる、その一つが無学な農夫の社会構造論なのです。

たった、それだけのことなのに「見浦さんの方へ、足を向けて寝られん」と感謝された時は心臓が引っくり返るほど驚きました。平凡な人間にはショックが大きすぎた。当然のことを、ほんの僅か、お手伝いだけで、その言葉をもらえたのには、私の社会構造論が役立っているのかもしれない。

2017.3.11 見浦哲弥

ウォーキング(2017/3/11)

毎年10月になると深入山ウォーキングなるイベントが催される。目下、その準備の人達で山道が賑やかである。深入山のグリーンシャワーなる広場が起点で、旧国道191号線を歩いて、小坂で新国道に合流して深入山を1周する、延長7キロ位か。途中で私が松原校に通学するときに泣かされた、標高890メートルの水越峠がある。

そして今日は開催日、9時頃から道路に人影が。日頃人影の少ない旧国道にウォーキングとはいえ賑やかになるのは心楽しいものである。それに若者の途絶えた道にカラフルなウェアが続くのは、往來の激しかった昔をしばし偲ばせる。

それにしても時代の変化の大きさに驚かされる。道路が整備され、公共交通が不必要なほどマイカーが普及して、歩くことがスポーツになり始めている。戦時中の動員で北広島町新庄にあった宿舎まで徒歩40キロあまり、休憩時間を含めて10時間かかった。勿論、歩き難い砂利道は子供にとって遠い異次元の世界と感じたものだ。

我が家の孫くん3人のうち下の二人が10キロコースにチャレンジした。ところが4キロでダウン、家に走り込んでゲーム三昧、日本の将来を思うと背筋が寒くなる。少子化で子供を甘やかすすぎると思うのは老人のひがみか。

考えてみれば旧国道が賑わうのは”しわいマラソン”と”深入山ウォーキング”だけ。戦中、戦後の、悪路に国運と生活を委ねた賑わいは、繰り返したくはないが、懐かしい。

我が家から旧道の峠まで約2キロ、(峠から谷に沿って下る急坂(オシロイ谷)があって徒歩の時は、このコースを歩いた)松原の高等科に通った2年間、お世話になった道である。自然が一杯でね、ムササビを見たのも、ドンビキと呼ぶ巨大なヒキガエルを見たのもこの道だ。もっとも人権もへったくれもない戦時中のこと、勤労奉仕と称して遅くまで作業をさせられて、明かりもなく夜空を見上げて頭上の隙間に導かれて帰った道でもある。自動車が普及を初めて、オシロイ谷の近道の人通りが途絶えてから40年近く、細い山道はヤブの中に埋もれて知る人以外は道の存在も忘れ去られた。

深入山ウォーキングは旧国道の車道を通って深入山を一周する。秋日和ならば絶好のハイキングコースだが、この道にまつわる物語を語る人はいないし、誰も知らない、ただ歩くだけ。100年あまりのこの道の歴史は、日本の近代史の一部と重なっているというのに。

時代が進んで便利になったのは有りがたいかぎりだが、歩くことが少なくなって要介護の老人が増えた感じがする。新聞の老々介護に疲れての心中やら殺人と言った記事を見るが多くなった。他人事ではない、懸命に生き日本の復興に力を注いできた人生、その功労の報酬に人に迷惑をかけないで、ひっそりと旅立つのが理想である。私は小5から働き続けてきたのだから、せめてそのぐらいの我儘は聞いてほしいものだと思っている。

今年も無事、深入山ウォーキングは終了した。ただ歩くだけでなく、私の提言の一部でも聞いて欲しいと思っている。

2016.10.2 見浦哲弥

小板の日米戦争(2015/1/17)

日本が歴史上で始めて外国に敗れた日米戦争から60年あまり経ち、戦争の体験者も次々と世を去って行きました。私は軍隊には行かなかったものの、国民総動員令で14歳で食糧増産や建物疎開に連れて行かれて戦争を経験しました。その仲間達も世を去り、生き残りは少なくなりました。

この小板でも、あの戦争中に戦死したもの、戦病死した人、シベリヤ抑留で辛うじて生き残った者、敗戦の年に緊急動員されて外国に行かないで敗戦となり命拾いをした幸運な人など様々でした。

折々に聞かせてもらった戦争の話も、私の人生と共に消えて行くのかと思うと少々残念で文章にしておこうかと書きました。

集落の上(かみ)から、まずYさん、彼は戦車兵、満州(北中国)のロシアとの国境部隊に派遣されていた。小便も凍る寒さの話しや、100キロも走ると戦車のキャタピラーを交換しなければならぬ話など、私には興味があった。

鋼板で出来た日本の戦車は、厚い鋳鉄製の防弾板で囲まれたアメリカやロシアの戦車には、全く歯が立たなかったことは、後日の読書で知った。

彼は幸運にも終戦直前に内地に配属替えとなりシベリヤ行きは免れた。

隣がKさん、海軍に志願して、水兵から下士官、そして敗戦時は士官だった。たたき上げの潜水艦乗り、電気関係の機関員で電検3種の資格保持者。

私の父の崇拜者で休暇に福井の家に泊まりに来ていたのを覚えている。水兵帽の水兵さんが、いつか短剣を下げて白の夏服の下士官に変わったときは、子供心に格好がええと感心したのを覚えている。

日米開戦の時は大型のイ号潜水艦の乗組員で、シンガポール軍港沖でイギリス東洋艦隊の見張りに従事、新鋭戦艦プリンスオブウェールズと、戦艦レパルスの出港を補足、追尾して海軍航空隊に連絡、マレー沖で雷撃機の集中攻撃で撃沈、チャーチル首相を落胆させた、日本海軍の華やかな戦いの話を聞かせて貰った記憶がある。

でも、戦争の中期からは戦っては敗れるの連続、レーダーの開発がうまくゆかず、出港直前まで東芝の技術者が調整に来てな、それでもうまく行かなくてな、仲間の潜水艦乗りは殆ど死んだと、そして「俺は戦争は嫌いだ」とはっきり宣言していた。

そのお隣がKFさん、彼は敗戦の年に徴兵検査、すぐさま徴兵されて九州に配属、1ヶ月か2ヶ月で終戦、戦争の厳しさを経験しなかった。おかげで軍国主義否定の私とは基本的に意見が対立、陸軍は悪くないとのたまう、小板で数少ない幸運な人間だった。

次はSさん、彼は19年に動員された、腕のいい石工さんで真面目な人間だった。小板の上田屋の娘さんと結婚、戸河内の寺領から小板に移り住んだ。見浦の田圃50アールを小作していた、小学校3年を頭に5人の幼子を残して兵隊に。

奥さんが懸命に働いたが仕事が遅れて、雪が降っても稲こぎが出来ない。稲を干す稲ハゼが雪の中に残った。見るに見かねた父の命令で稲の脱穀を手伝った覚えがある。

動員先は陸軍船舶部、輸送船に乗って船を守る？部隊、(当時は輸送船でも小型の大砲か機関砲を積んでいた)敵の軍艦や潜水艦、航空機に発見されれば即沈没だが気休めの装備の操作係。

秋に一時休暇で親父さん挨拶に来られた折り、「命拾いをしました、サイパン島に軍需物資を運びましてね、陸揚げが済んで島を離れた翌日、島はアメリカの艦隊に包囲されましてね、もう何時間か遅れたら命を落とすところでした」と話されたのを覚えている。その後サイパン島の軍隊は全滅、民間人も多数死亡したのは周知のとおりである。その後は輸送船の消耗が激しくて乗り組む船がなくなり、無事に復員された。

そして、F君、芸北町にあった大佐川電気利用組合の電気さん。彼のことは、陸軍で満州のロシアとの国境の警備隊だったことしか知らない。が、彼は小坂でただ一人のシベリヤ抑留の体験者、ご存じだろうが満州で逃げ遅れて捕虜になった軍人がシベリヤに連行されて強制労働をさせられた話、彼は不運にもその一員となった。何年働かされたのかは私の記憶にはないが、一、二度地獄のようなシベリヤ体験を聞いた覚えがある。極寒の地で劣悪な居住環境、不足の食料、独ソ戦で荒廃したロシアでは一般の国民も苦しい生活だったと言うから当然かもしれないが、膨大な死者（5万人とも6万人ともいわれる）を出した。その話しを彼は「仰山死んだで一、ところがの大方が町の人での、田舎の間間は中々死なんのんよ」と、日本国内の貧しい農村で育った人間は、町の人より耐久力があつたと言う話した。しかし、粗食でも血糖値を高く維持して命を支える貧農の体は、豊かになった戦後の食事で糖尿病の多発を引き起こし、寿命を縮める一因になったのだから皮肉である。彼の話で忘れられないのは、日本での職業を何度も調べられたと言うこと。大工、左官、電工、その他、エトセトラ・・・当時のロシアで不足していた技能の持ち主だったら、即、收容所から出されてロシア女と結婚させられ職場につかされる、腹いっぱい飯が食えてな、地獄から天国への道があつたんだ、でもな、それは生涯日本に帰れない道、歯を食いしばって頑張ったんだと。当時、ロシアは独ソ戦争で2000万人ともいわれる若者を失い、荒廃した国土を再建する為、猫の手も借りたい事情だったと、勉強になりました。

晴さんの長兄のKRさん、彼は吉田町の青年学校の先生だった。私に動員がかかる前年、彼の家族が次々と広島陸軍病院に見舞いに行くのを見た記憶がある。間もなく病死と聞いた、陸軍に徴兵された彼が過酷な新兵教育に耐えられなかったと。何しろ5歳も6歳も年下の私達の動員の現場でも殴る蹴るの暴行は日常茶飯事だったからね。人間の値打ちは一銭五厘（徴兵通知の葉書の値段）と言われた時代、死因は肋膜炎だと聞いた。優しい大人しい青年だった記憶がある。

隣はTさん、彼は海軍の志願兵、要領のいい奴で悪運強く生き残った。燃料の尽きた軍艦が樹木で偽装されて、瀬戸内海の島陰に砲台代わりに係留されていたなど、敗戦間際の海軍の話をよく聞かされた。夏で偽装の木が枯れ始めると「木を取り替えないと丸見えですよ」とアメリカ軍機にビラを撒かれて馬鹿にされた。

KHさん、彼はKFさんと同年兵、敗戦の年に緊急徴兵された。配属されたところが陸軍の通信隊、伝書鳩の世話をするのが仕事、善人の塊だった彼は軍隊では苦労は少なかったらしい。ところが親父さんも徴兵されて、予備役の衛生兵だった、御年47歳、平均寿命が50歳に満たない時代、正直よぼよぼの兵隊さんだ、それまで召集しなければいけないほど追いつめられたんだ。そんな戦争を天皇まで脅かして始めた将軍は現在靖国神社に祭られている、そんな矛盾には国民の声が小さい。でも考えて欲しい。一軒の農家から働き手の男を2人も軍隊に招集して農村が成り立つはずな

い。それでも国民の食料を作れという、軍国主義とはそんな思想なのだ。
ちなみに47歳の老人兵として徴集されたのは、他には松本熊市さん、児高德馬さんの2人がいた。

N君、彼は腕のいい溶接工、広島郊外の軍需工場で働いていた。幸い原爆の直接被害はうけなかったものの、直後の市内で死体処理に動員されて連日作業をした。実体験だけに身の毛もよだつ話を淡々と聞かせてくれた。私も8月9日に出張で立ち寄った可部駅で駅前広場にぎっしり並べられた被災者の死体を見た。まだ息のある人は日陰や貨車の中、目と口だけを残して包帯だらけの被災者が水、水と訴える微かな声、今も耳に残る、真夏のことで生きている人にも蛆が湧いて這い回る姿は正に地獄だった。

西岡君は街に倒れている死体をトラックに積んで街角に積み上げて重油をかけて焼く仕事をしたと、2人で手足を持って放り上げる、皮膚がズルとむけてねと、私の体験の何百倍もの辛い話しは戦争を始めた指導者を憎む私の原動力だった。

Mさん、陸軍の下士官、陽気で明るい人で私の製材の師匠さん。

彼は南方に派遣された。そのニューギニア島での戦闘の話は忘れられない。ニューギニア島は有名なラバウルの近くと言え判って貰えるかな。オーストラリアの隣の島でね。

島とはいえ本当は日本の本州にまけない大きな島、オーストラリアの反対側に上陸して島を横断してポートモレスビーという港を占領して対岸のオーストラリアを攻撃するという、壮大な計画だったとか。密林の中に道を造り中央の大きな山脈を越えて対岸に達する、口で言うのはたやすいが、筆舌で表わせない現場の苦労は東京の参謀本部いる奴らに判らない、ただ命令するだけ、こんな事が山盛りの戦争だったのですよ。

ようやく山脈を乗り越えてオーストリア軍に接触して驚いた。上官の話と違って彼等の勇敢なこと。攻め込んだら、すぐに敗走すると聞かされていたのが、案に相違で猛然と反撃されて手も足も出ない。おまけに我が軍は明治38年制定の38（サンパチ）銃なる小銃、弾が5発しか出ない、それも一々操作をしてね。ところが豪州軍は自動小銃、連続して80発も弾が出て戦争にならない。そこでオーストラリア軍に出会ったらひたすら密林の奥に逃げ込んど。彼らも地下足袋なる履物で足音も立てずに出現する日本兵は怖いから林の中までは追ってこなかったからなと。ところが大問題が起きたという。日本の軍隊は米の飯が食料、飯盒なる鍋で炊いて食事をする。ところがジャングルの中で焚き火をして煙が上がるものなら戦闘機から爆撃機までが殺到して爆弾をおとし飯が炊けない。飯が食わないと戦争は出来ぬと、日本兵の士気は地に落ちたんだって。そこへ知恵者が現れて炭を使えば煙は出ないぞと発言、おまけに日中なら敵機の目にとまらない、当時は赤外線センサーなるものは前線になかったからな、その案は直ちに採用されて「誰か、炭焼きが出来るものはいないか」と募集されたとか。但し炭焼きといっても炭窯を築いて木炭にする全工程の技術屋でなくてはいけない。彼は動員前は炭焼きさん、早速、応募したとか。即、木炭の増産を命令されて監督に、敵機の来ない後方の密林で木炭生産が始まったんだとか、命令される兵隊から炭焼きの監督さんに昇進、近場のガダルカナル島では日本軍全滅の悲劇もあったのに、敗戦まで楽をさせてもらいましたと。

次は陸軍上等兵のKさん、衛生兵である。陸軍で習ったことが全て正しいという軍国主義者、社会主義にかぶれた見浦を認めるなどもってのほか、敗戦後も20年位は私の話を聞こうとはしなかった。しかし、全てが逆転した戦後の社会は彼を受け入れなかった。様々な試行錯誤の末、全てを失った彼は死に際に、「見浦が正しかった」と呟いたと息子さんから聞いたときは、

なにも言えなかった。

I Hさん、彼も陸軍上等兵。確か中国戦線だったと思うが、記憶が定かでない。機関銃の砲手と聞いていたが、戦争の話を聞く機会がなかった。ただ腕に小銃の貫通銃創があった。

I Mさん、Kの兄さん、大下に養子に入った。彼は中国戦線で2度目の召集で戦死した。私が中学の1年の折、奥さんが生まれたばかりの娘さんを背負って広島まで見送りに行くのに出会った。2人とも泣きながらオシロイ谷を下って行くのを見て戦争の悲劇の一端を感じた。兵隊になって戦死することは名誉だと教えられて、信じていた少年が、先生の言葉は本当かなと疑問を持った最初である。彼は中国戦線から白木の箱で帰った。

Nさん、私を弟のように可愛がってくれた好青年。彼は海軍に志願した。そして戦争の末期、戦死したと箱に入って帰ってきた。中には名前を書いた白紙が1枚、それで好青年が海に沈んだ。もう一度言う、あの戦争を始めた将軍は靖国神社にいる。

軍隊に行った人達は、他にも2-3人いる。現存している人も居るが、戦争の話は語られることがなかった。辛い、悲しい、矛盾が山積していた世界だったのは、私も動員で経験したことから推測できる。思い出したくないことが山積みだったのも。

最後に声を大きくして言う、私は戦争が嫌いだ、始めた奴はもっと嫌いだ。

2015.1.17 見浦哲弥

追記

私の同級生も2人死んでいる。一人は斎藤正司君、彼は高等科卒業後（いまの中学3年の年齢）海軍航空隊に志願して入隊した。敗戦前の日本には訓練する飛行機も機材もまったくなくて、毎日が手作業の飛行場作りだったとか。短い時間だったが過労で体を壊して帰宅後間もなく死んだと聞いた。アメリカの飛行場作りはブルドーザだったのにね。

もう一人は一級上の藤本さん、彼女は従軍看護婦を志願して帰ることはなかった。

豊かな時代になって爺ちゃんの時代に起き、体験したことを誰も話さなくなった。でも2度と起こさないためにも聞いておくべきだと思うのだが。

あーしわかった(2017/7/15)

86歳も半ばを過ぎた。まだトラクターに乗り、2トンダンプの運転は出来るが、1日が終わると「あーしわかった(つらかった)」と溜息が出る。それなら働かなければいいのではないかと、反論がありそうだが、古い機械でも動かなくなったら、即、スクラップ、人間である私はスクラップになって、ただひたすらに終焉を待つのは性分に合わない、動ける間は少しでも働いて不用品扱いにならないようにと自分に言い聞かせるのだ。

とは言え、寄る年波は確実に体力を落としてくる。おまけに記憶力も低下してトラクターのレバーの操作で一瞬迷うことが出始めた。友人だったF君は70代で田圃の中で立ち往生、どう操作すれば動くかを忘れたのだ。どう考えても思い出せず、お隣にトラクターが故障したと訴えた。調べてみたら操作を失念しただけで笑い話になったが、本人はそれを機に痴呆が進行し始めたのだから笑い事ではない。

私は当時の彼より10歳以上高齢、当然ボケ老人と言われても不思議はないが、2度とない人生であるから、1日も長く現役でいたいと努力している。

と独り言をつぶやきながら毎日を働いている。吾輩は人間だから失われてゆく能力を如何に補って補足して行くか、そのくらいの知恵はまだ健在だと自分に言い聞かせながら毎日を送っているのだ。従って毎日の仕事を100%までとは言わないが70%位はこなしていると自分に言い聞かせている。人はお世辞に「元気なのー」と言ってくれるが、これはあてにはならない。

が、自然は厳しくて無情である、そして確実に知力と体力を奪ってゆく。だから夕方には「しわかったのー」と自然の溜息が出る。そこで自分が普通の人間であることを再確認するんだ。

しかしながら意地っ張りで強情で自他共に認められてきた私である。足が痛くとも、疲れていても、対策を立てて頑張る、考えて見れば随分意地っ張りの生き様だった。その結果でもあるまいが見浦牛の評判は中々のもの、テレビで幻の見浦牛と評された、これは家族全員が長年頑張ってきたお陰、従って「疲れた」と言いながら最後まで頑張ることにしているのだ。

2017.7.15 見浦哲弥

お祭りと饅頭焼き(2017/5/24)

2012.10.28 今日はお宮の幟(のぼり)建て、例年村祭り(11月2日)の前の日曜日が、お宮の掃除と幟建ての日である。去年は神楽団の長老が死亡したとて、神楽の奉納は中止だったが、今年は神楽があるとて、少しは明るい雰囲気だった。もっとも舞子は5人、いずれも広島在住、小坂居住は60歳あまりの人が1人という現状では、今年が最後か?例年見浦家が勤めていた饅頭焼きは、去年の神楽中止を機に、もう止めようと話し合っていたところに、神楽団からも正式に中止要請があった。80歳になった晴さんにも、子育て最中の亮子くんにも無理、一つの時代が終わった。

饅頭焼きが始まって、もう20年になるか。祭りにやってくる府中の孫たちを見て、晴さんが言い始めた。「昔は神楽の晩には夜店が出てたな」と。私も記憶がある、神殿の前の大杉の根元にテントをかけて、たった1軒、露天のおじさんがやってくる。三国のお祭りの露天には比べるべきはないが、子供達には胸躍る時間だった。それが日中戦争が激しくなった頃なくなった。

敗戦で戦場から復員してきた若者たちが結婚して、子供たちが生まれて小坂に賑やかな時代がやってきた。お祭りには夜店がやってきて、地元の堀田商店も饅頭を焼き始めて、小さな鎮守の森も神楽の夜は賑やかだった。

ところが日本の繁栄に逆比例して若者が減り、住所を都会に移す家が出始めて子供たちが少なくなった。外来の夜店はとっくの昔に来なくなって、堀田商店の饅頭焼きも赤字続き、集落の子供は10人ばかり、太鼓の音は昔と同じでも、寂しい村祭りが当たり前になった。

ところが我が家の晴さんは少々発想が違う、夜店がなくて寂しいのなら自分たちでやればいけないか、子供たちに自分たちが味わった、神楽の晩の夜店の楽しさをプレゼントすればいい、プレゼントは商売でないのだから、利益が出なくても運営する方法があるのでは。

実は彼女が「考えたんだが一」と話し始めたら大変で、先ず反論が出来ない、華やかではないがポイントを突いていて、なるほどと賛成させられるからだ。何しろ、集落のことから、農協の理事、農業委員、PTA、まで、あらゆるところに口を出す、正論と感じると無視はできず、解決策を模索して奔走するのは私、長い時間の彼女との生活はこれで何度も泣かされた、饅頭焼きもその一つだった。

そこで条件を付けた、子供たちが負担にならない値段にする、専用の道具は買わないで家庭用の器具で間に合わず、利益はでなくても材料代だけは確保する、その条件を守るのなら最初の資金を見浦家で負担する事に賛成する、もちろん人件費は無償奉仕ということで。

もともと金儲けが目的の発想ではない、年に一度のお祭りを楽しみの子供たちに神楽だけでなく、もう一つの思い出を作ってやろうが発想の原点、幼かった自分の思い出と重ねての提案だから、家内も私の提案を受け入れた。

世の中には発想は良くても現実が伴わないことが多い。晴さんの饅頭焼きもプラン倒れにならないかと心配したのだが、もともと田尻一番の根性屋さん、言い出して走り出したら逃げ出すことが出来ない性質、問題が起きるたびに懸命に対策を考える、圏外の私としては、その熱

意を牧場に振り向けてと口まで出かかったが、反動が恐ろしい、ひたすら見守るだけ。が、子供たちが、孫が動き出した、小板の祭りに帰るのは饅頭を焼くためと目的まで変わって男どもを除く見浦婦人同盟のお祭り行事として定着した。おまけに味もいと評判、儲けは出ないまでもお祭りの神楽と言えば見浦の饅頭焼き、子供たちも小遣いを固く握って神楽の晩をまつ。が、それなりの時間が経過して彼女も年老いて気力が無くなった。我が家の孫達が小板神楽を見ながら見浦饅頭を食べる、そんな時まで頑張るが、続かなくなった。そして遂に中止、翌年か翌々年には神楽を奉納しようにも舞子の動員が困難になった。そして100年余り続いた小板神楽団も解散、お祭りの夜の太鼓も途絶えた。

時は農村の過疎を乗り越えて無住の集落が出現する時代、一時とはいえ彼女の努力は小板の河内神社の神楽の最後に花を贈った事になった。

あれから、もう10年あまりも過ぎたか、秋の村祭りの日は数少ない住民が集まって境内や内陣の掃除をするだけ、落ち葉を焼きながら昔は賑やかだったがと思い出話に花が咲く、それが何時まで続くかは誰も知らない。
そして晴さんの饅頭焼きも思い出の彼方に消えてゆく。

2017.5.24 見浦哲弥

最高の季節(2016/9/1)

お盆が過ぎると小坂最高の季節がやってくる。気温が 20 度をきり、爽やかな空気が、深入山の山頂から贈り物として下ってくる。まだ日中は夏を偲ばせる暑さなので、早朝の一時は小坂の数少ない美点を再認識させるのだ。

お向かいの S 君は大阪で大型トラックの運転手として働いた経験を持つ。その彼が生まれ故郷の小坂に帰って 30 年近く、子供さん達は大阪で暮らす。その彼が季節の変わり目ごとに小坂が最高ともらす、「空気がようての、水が美味しゅうての、景色がいい、おまけに地震がのうての、水害がない、日本で一番ええとこでの」とのたまう。私の記憶では 38 (さんぱち) の豪雪とルース台風という水害があったが、いずれも死者は出なかった。一度台風の通り道に当たって立木がなぎ倒されたことがあったが今考えると竜巻の通り道のような被害だった。それ以外記憶に残るような災害が無いのだから、ま、住みやすいところなのだろう。

何回も繰り返すが私がこの地に帰ってきたのは昭和 16 年 (1940 年)、従って 76 年暮らさせて貰ったということになる。その間、見浦家にも、小坂にも、戸河内町にも、いや日本国にも大変動があった。私の文章など、その表面をなでたに過ぎない。その軌跡をたどると辛かった事のほうが多くて思い出すのも苦しいが、平和な晩年を迎えているのだから幸せ、幸運と言えるのかも。

私は、人生は 50/50 の割合で幸運と不幸が与えられていると信じている。不幸だけの人も幸運だけの人も存在しないのだと。しかし、小坂の自然、風景は S 君の感慨と同じ最高だと思っている。そして私の人生も幸運の方が多かったと感じているから、トータルではいい人生だったと宣言が出来る。誰にとっても故郷は素晴らしい、そして素晴らしい思い出になるように努力をしなければならない、二度とない時間を過ごさせてもらったのだから。

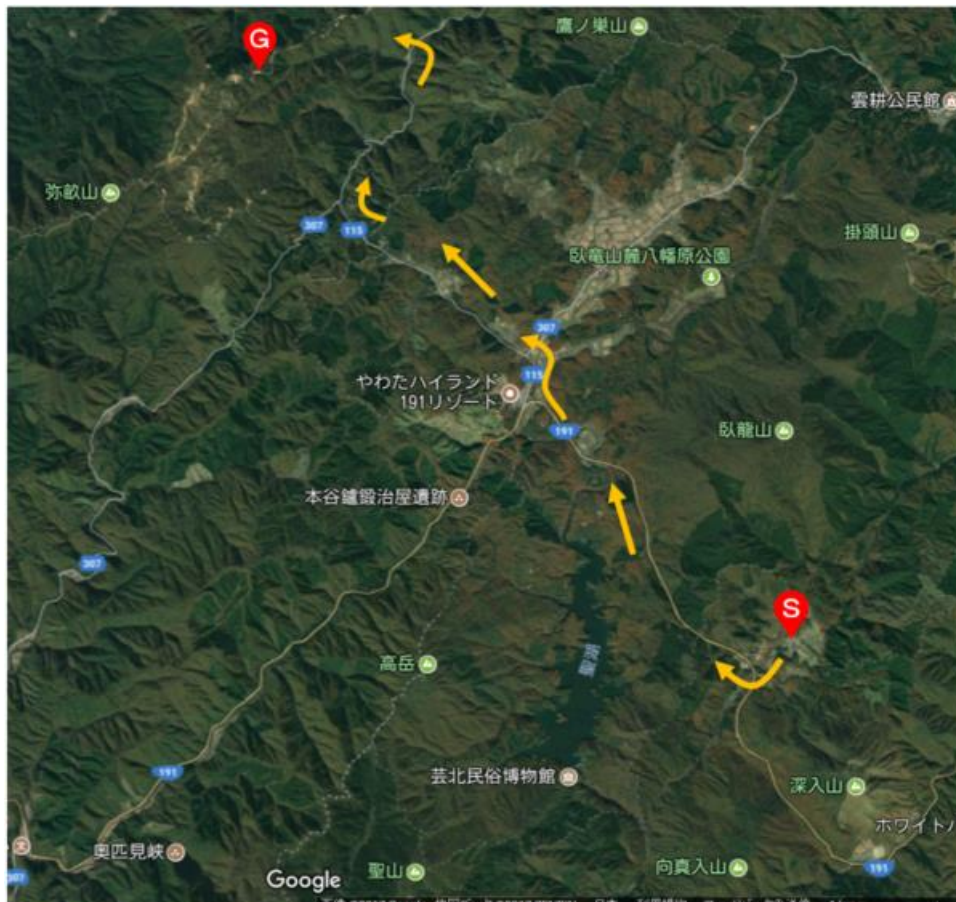
今日も深入山は綺麗だ、臥龍山も見事だ、そして私の時間もまだ続いている。

2016.9.1 見浦哲弥

弥畝山風力発電所(2016/9/20)

2015.11.2 裕子さんが律子のお店の応援にきている。その食後の話、お盆に深入山に登ったら風力発電の風車が見えた、あれはどこかとグーグルで検索して話題になった。そこで百聞は一見と見学に行った。

裕子さんと孫の淳弥君と、北広島町八幡まで国道191号線を北上、191スキー場の三叉路で右折、県道波佐匹見線を約1キロ弱、再び三叉路を左折、県道115号線に入る。2車線の道路は間もなく1車線に、平坦な道路を1キロも走ると集落が現れる、木東原集落である。整備された水田と数件の農家、彼方の低い山すそに2軒の別荘が時代の変化を告げるだけで、数十年前の八幡村の風景が現存する。私が30歳代、飼料の稲藁を買い集めるために通った集落、懐かしさもひとしおの集落である。集落の中の平坦な道をたどること2キロ、殆ど登ることなく峠である。木東峠海拔798メートル、ここから比較的なだらかな坂道を約1キロ下ると島根県の波佐匹見線との三叉路に出る、右が周布川の源流である。その川に沿って深い谷をくだること2キロ、小さな集落の中の三叉路を左に曲り坂道を約3キロ登ると峠、左に行くと弥畝山であるが現在は私有地。



峠の手前に資材置き場があった。取り付け前の巨大な翼が3枚、運搬用の長大なトレーラーが翼を1枚積んで停車していた。長さが40メートル以上もあろうかという翼は地上で真近で見ると、その巨大さを実感する。峠の交差点から左右に伸びる作業道があって、間隔を置いて風車のタワーがそびえる。低い灌木が繁って道路からは見えるのは数個のタワーだけだが列状に建設されていて壮観である。見学時は2基が建設中で1基はタワーと発電機が取り付けられていて、もう1基はプロペラの取り付け中、100メートルに及ぶクレーンがそびえて羽根が1枚だけ装着されていた。作業を見学できたら感動するだろうと思ったんだ。

峠から日本海側は島根県弥栄町、比較的平らで小山が散在する。それが弥畝山で急にそびえ立って、峯が連なっている。地球の自転に伴う気象上の風を利用するには最高の地点かもしれない。この地形に目をつけた技術者は只者ではないと思ったが、冬季のすさまじい気象をしのぐ地元民としては果たして強度的に耐えるものか少しばかり不安を覚える、他人事ではあるが。

もう一つ不安に感じたことがある。エネルギーを失った風がもたらす気象の変化である。実は小坂集落の隣に出来たダム聖湖は冬季の積雪の変化をもたらし、深い谷間の集落にあった樽床集落が水没し、湖面の上昇で風の通路が45メートルあまり上昇した。その上を吹き抜ける北風は勢いを増して我が小坂は多雪地帯の八幡地区と同じ積雪量、もしくは多いくらいに変化した。同じような現象が風下になる八幡地区で積雪の記録を更新しないかと、老婆心ながら心が痛む。

弥畝山は標高961メートル、その稜線に100メートルばかりの風車が立てば、八幡から見えなければおかしいと思っていたら、息子達から雄鹿原の診療所の帰りに八幡洞門を通過してすぐに5基の風車が見えたという報告があった。最近の変化なのと県境の向こうの出来事なので情報が遅れているのかもしれない。建設が完了した時は何基の風車が稜線から顔を出すのか、これも興味がある。この地方も携帯電話の中継塔が思いもかけないところにまで建設されて、たまのドライブにこんなところにと驚くのだが、今後は風力発電の風車で驚くことになるのかも知れない。

今まで利用されなかったエネルギーを電力に変えて活用する、素晴らしいことである。しかし、50メートルに近い羽を回転させるメカニズムは近年の技術の進歩がなくては成立しなかった。特にプロペラの回転軸の取り付け部の荷重はとんでもない数字になるはずである。回転軸に密生している取付のボルト穴はその巨大な荷重を想像させる。久方ぶりに近代工業発展の成果の一端を見た。

ともあれ、こんな山の中まで開発が進んできた、道路の改良で都会が近くなった、ダム建設で山の中にも日本近代化の足跡が見えると思っていた矢先、今度は山の稜線越しに風力発電のプロペラが見える。時代の足音が近づく一方で、人口流出で山村が崩壊してゆく、この矛盾をどう解決してゆくのか、老い先短い老人の一人として、そのことを心配している。

2016.9.20 見浦哲弥